

〔楽園の美術—夢の小宇宙—展によせて〕

## 楽園へのあこがれ

東アジアの美術作品には、さまざまな形でユートピアへのあこがれが表現されています。一見ただけでは見過ごしてしまう造形のなかに、表現した古人の心を見てみようというのが、このたびの展覧「楽園の美術」の狙いといってよいでしょう。

たとえば中国では、実用品である貨幣に、特別な思いが託されてきました。中国の貨幣は長い歴史を持っており、最初は子安貝を使ったり、小刀や農具の鋤・鋤を象ったものが使用されていましたが、戦国時代の末(B.C.3世紀)に、円形の銅銭が登場してきます。その真中には丸や四角の孔が開いていました。これは貨幣の製造過程で、輪郭を磨いて整える時、たくさんの貨幣を孔に通して一度に磨くためだったと考えられますが、それには孔に通した貨幣が回転しないほうが都合です。そこで孔は方形に統一されていきます。秦の始皇帝の作らせた半両や前漢の五銖などが、完成された形と言っていいでしょう。半両では、まだ裏面が平ですが、五銖になると、表裏とも外縁と方孔の周りに、隆起した輪郭が表現されるようになり、これがそれ以降の中国銭の定型になりました。

最初、全くの実用から起こったこの形が、やがて宇宙を表すものと考えられるようになったのは興味深いことです。晋の魯褒という人が、当時横行していた拜金主義を風刺して、「銭神論」という文章を残しましたが、その始めに次のように言っています。

銭の体たる、乾坤の象あり。内は即ちそれ方、外は即ちそれ円。

「銭の形は天地に象っている、内側の孔は四角く、外側の輪郭は円い」というわけです。伝統的な中国の考え方では、地は方形、天は円形をしているとされてきました。銭の形が「乾坤」すなわち天地を象っ

ていると言うのは、それを指しているのです。中国の銭では円形方孔の銭体に、漢字で2字ないし4字の銘が入られ、額面や通貨であることの表示がされるわけですが、まさにそれは形と文字が一体となっており、天下の回りものであることを示していました。

一方、この不思議な効力を持った小物体に、人々は人知を超えた能力があると感ずるようになります。まじないや魔除けの力です。流通貨幣と同じ形をしながら、実際の価値はない、こうしたまじない銭は、早くから作られ、現在に至るまで縁起物として、中国をはじめアジアの社会に根を張ることになりました。大和文華館にある金銅厭勝銭3点(図1~3)は、そのようなまじない銭の実例です。まじない銭では、額面や銭銘の字を、用途にふさわしく改変したり、図柄に置き換えたりすることが珍しくありません。大きな2点はその例で、銘は「永安五男」と変えられ、日月や四神がデザインされています。

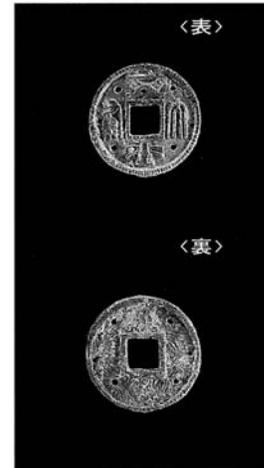
図1 金銅厭勝銭 唐時代  
大和文華館蔵



図2 同



図3 同



「永安五男」という貨幣は実在せず、これは北魏の永安五銖(529年発行)をもじったもので、長く多くの男子に恵まれるという、めでたい文句です。四神は、日本の古墳壁画でも有名な四方の守り神、青龍(東)、朱雀(南)、白虎(西)、玄武(北)ですが、日月とともに、これらが円形方孔の銭にはめ込まれているのは、四神に守られた宇宙がイメージされているわけで、「永安五男」の実現が約束される楽園ということでしょう。この二つは、ほとんど同じデザインで、豪華に金メッキされているところも同じですが、細部は少し違いがあります。貴族の結婚や誕生祝いなどの縁起物として、手作りで少数作られた物と思われまふ。もう1点の小さい銭は、銘が北周の五行大布(574年発行)そのまま、裏に花文様を刻み込んでいところが異なります。これも厚い金メッキが施されていますが、小さな孔が6個開いていて、あるいは何かに縫い付けて携えたものかもしれません。

これらのまじない銭は、作りの特徴から、みな唐代の作品と考えられまふ。中国のどこから出土したか不明なのは残念ですが、大和文華館の所蔵品第1号として、3点まとめて登録、保管されてきました。大和文華館の中部義隆学芸部次長は、これらの品が第1号になっているのは偶然ではなく、創立に際し縁起を担いだためではないか、と言われたことがあります。そうだとしたら、古代のまじない銭が、美術館の将来を壽ぐ役割を担ったことになり、創立者の計らいは、なかなか心憎いと言わねばなりません。

以上に取り上げたまじない銭は一つの例にすぎません。人々は限定された平面や隙間に、実在や空想のさまざまな鳥獣や植物、人物、文様をデザインすることによって、理想郷を表現してきました。展示品の中の小宇宙に目を留め、古人の願いや憧れに、思いを致していただけたらと思います。

(奈良大学教授 東野治之)

季刊 美のたより No.159

平成19年6月29日

発行 大和文華館